

同人作品

こたつむり 秋山義仁

香は凍り色は消え去る北国の時の物差し五時は残照

こうろぎの枯葉踏む音遙けて鶴は空につながる道に立つ

垂れ下がる木守りリングに鳥は来ず雀は十羽電線ゆらす

猿を見る食物あるか住あるか寒くはないかお乳は出るか

秋行けば雪虫来たり雪来れば夜寒が増して皆こたつむり

紅葉にいだかれし家はるか見ゆ山は雪被り空にとけこむ

あの山は雪を冠りて神になる人影去りて神話はじまる

裾を逢う日に五便のバス通り冬木ゆるがしまた雪降らす

自販機が今宵も灯りともすころバスに客なししじまを運ぶ
日の光ぼろぼろこぼれふりかかるここに姥捨てありて塚ありて

冬の陽 石邊綾子

生きるとは老いさらばえてゆくものと踵の割れに向き合いながら
部屋中に苺の香りが満ちてゆき夜はこれからもうひと仕事
取り出せばすこし湿気たる焼き海苔に忘れた日々の長さを思う
湘南のまぶしき海にさらされて小暗き我は霞んでゆけり
江の島に寄せては返す波の音に箏の音色を合わせてみたり
夕暮れを待たずしてはや窓際の空気冷たく空咳ひとつ
寝返りを打てば冷たし如月のワノコの介護を思い出したり
冬の陽にポインセチアの鉢を置く命欲するような花びら

寒さも又樂し 井上省吾

寒さ増し冬の訪れ身近まで揺動いてる木の葉ちらちら
温度計眺めて見てはまだいいか電気節約重着をして
少しだけ窓の近くにもみじの木紅葉見たし寒さ対策
山に降る雪は積りで地下深くやがて表われ里を潤す
四季があり有難きかな寒い冬自然の力満喫してる
寒くても体動かし暖まる内なる力すばらしきかな
あちこちと片付けをする年の暮忙しいけど気持晴やか
寒い中あれやこれやと思いつき手足動かす我ここにあり
冷蔵庫消費期限見て決めるいろいろ悩み一日終る
ヒラヒラと紅葉の葉が舞い落ちる春待つ木々が一休みする
水仙が寒さの中に花開き庭を彩り目を楽しませ

雲の間に光が差しして暖かく窓辺に寄りて歌詠む余裕

紅 熊谷恒樹

一枚になつてしまったカレンダー
雪中紅い柿の実の絵

野ウサギがひらり飛び込む裏藪に千両と南天紅くかがやく

音楽 甲村雅俊

音楽を聴きつつ帰る夜の道このまま歩く地の果たてまで

果たてとふ古語を用ゐるわが歌にあといささかの真心よあれ

真心を詠まねばならぬ夜も更けておのれが決めた歌の締切り

締切りにうんうん唸りながらも歌を詠まねばページ埋まらぬ

埋め草のごとき短歌を作るなりこのやうに詠む歌は冒瀆

冒瀆の言葉の意味を字引きにて調べてひるむ小心者は

小心の言葉の意味は次のごとし気が小さくていつもびくびく

びくびくと生きながらへて数へ年ことしはつひに五十六歳

五十六は四捨五入して還暦だ本卦帰りはもうあと五年

五年目の令和なれどもこの年号初めはだいぶ不評であつた

不評でも五年も経てば世の中に並べて受け入れられる元号

元号を改めようよ改元のあの素晴らしきすがすがしさを

すがすがしい朝の空気を吸ひながら軽やかにゆく鳥ならねども

鳥ならば冬の終れば北方のわがふるさとのあの地へ帰らう

帰るべきふるさとはまだ若いころあつた気がするもう分らない

分らない問ひは飛ばして先へ進むいつか解答できる筈ゆゑ

解答の準備のやうに黙々とダンベルを持ち励む筋トレ

筋トレはこつこつとやれ人知れず資格試験の勉強もまた

勉強は戦ひである自分との自分を愛すゆゑの戦ひ

戦ひを続けるロシヤ兵どもは侵略をやめて自国へ戻れ

戻るとは氷が溶けて水になる冷めたるお湯が水になること

水道の蛇口をひねり水を出し両手の指を合せて洗ふ

洗濯を終へた衣類を物干しの洗濯バサミで挟みて吊るす

吊るされた柿の揺れたる冬の日
に風吹けば増す柿の甘さは

甘味料の多くは化学物質になれど砂糖の甘さ忘れず

忘却の時間とともに進みゆく度合ひを示す忘却曲線

曲線を描いてネットの高さ越えテニスボールは相手コートへ

コート着て冬のお洒落を楽しめばまだしばらくは続く寒さよ

寒つばき咲きゐる冬の公園に憩ひてわれもほつと一息

一息に貝塚坂を駆け上がりまた下り行く夫婦坂まで

夫婦坂交差点付近朝六時すでに車は渋滞したる

渋滞にのろのろ運転するやうにわが人生の歩みのろのろ

のろのろと言へば猛威を振るへるも何処へ消えたかノロウイルスは

ウイルスに色々あつてそのどれが良いか悪いか分らぬ怯え

怯えれば高性能の防音の耳栓をして就寝したり

就寝中わが脳内に巧妙な不鼓自鳴にて響く音楽

世直し

何故にわれは青木を枯らしたかわからぬままに年末淋し

あらたまの年の初めを迎へても今年を生きる勇気が湧かぬ

世直しの前兆なるかしろたへの雲を焼きつつ朝日が昇る

早起きの孝行息子になりたれば親のオムツを替へに行くなり

追憶のオートバイ 花井 和

セルまわし一秒、時間を止める音 古いエンブレム、君のオートバイ
どこにもない秘密の森の奥に咲く花が君だったあの頃の日々

「止むを得ず」を「止む終えず」と書く君と言い争って i P h o n e 水没
あの頃は愛というより少しだけ愛しい言葉があつた気がして

ボタン押し呼吸を止めて目を閉じて三つ数えると世界は夕暮れ

「あの時のあの場所行き」のチケットをみどりの窓口が売り出す噂

遠い日の恋 氷室敬子

朗らかに元気なぼとすに歌載せてぼとす短歌会を知らしめよう

遠い日の恋を語るは冬の日に固まった花びら壊すように

ぴーぴーと遠くから音鳴らし夜明け前から命繋ぐあり

グワグワと一心になくのは巨大樹の樹液を飲んで息する虫か

夜空 本田洋子

一ひらの楓もみじ葉美しく思わず拾い手帳に挟み

久かたの雨音のして秋時雨あきしくれからから陽気に少しの潤い

通ふには娘の家は遠けれど右手の杖が助けてくれる

銀杏の葉雨の舗道に張りついて幾何学模様成せるも美なり

セイタカアワダチ草が枯れる頃土手にすすきがなびきて揺れる

集会の終りて外へ出でたれば夜空に月と星の輝き

暮れ残る夕焼け空のオレンジの窓辺から見ゆ小さく燃えて

見ましたか興奮ぎみで天体ショウ天王星は見えなかつたね

公園に風もないのに舞い降りる赤や黄の葉は秋物語

低い木を野リスも走るこんな日を小春と呼ぶと小菊ポツポツ
物価高夜の暖房何にする？ 昔ながらの湯たんぽと猫

鴨にピラカンサは啞えられこれから何処に撒かれるのでしょうか
叩いたら生血をたっぷり吸い込みてしぶとく生きる十一月の蚊
引っ越して二階に個室を持った孫嬉しかろうに初めての部屋
焼き魚ずっとメニューに取り入れず久しぶりです秋刀魚の塩焼き
十二月ほんのり甘く薫るのはふと振り向けば枇杷の花なり
白菊や団地の庭の一遇に無垢花嫁の清々しさよ

春まだ遠きかな 若杉ゆき

いわし雲枯れ葉舞散るこの空にいくつの想い飛んでいるのか
茜さす夕日に染まるこの空にいくつの想い溶けているのか

たとえれば人の心はヒカリのよう瞬きすればまた消えていく
ベランダの植物達愛情かける程に元気に育つ

人の子はかまいすぎると駄目になる愛の振りかけ程ほどにせよ

莉子5さいボキヤブラ豊富つぎつぎと知らない言葉飛び出してくる

孫のリコバレエコンサート初舞台堂々として笑顔满面

冬火花クリスマススイヴサプライズビルの合間に大輪の花

わが息子やつと見つけた幻のやりたい仕事それもつかの間

信じたいいつかは春の風が吹く胸の痛み心心の痛み

人生は今どのあたりあのかのときの覚悟は何処に春まだ遠き